

越前朝倉氏の

隆盛を支えた名将、

朝倉宗滴

あさくら そうてき

戦 国乱世にあつて「静かにて治まる国」と評された北陸の大國、越前朝倉氏。その歴代当主を補佐し、朝倉氏の盛威を高めた「軍奉行」であつたのが、朝倉宗滴です。

宗滴は、文明9（1477）年、朝倉氏初代当主、朝倉孝景の末子として生まれました。歴代当主が称した小太郎教景を名乗っていた時期があり、嫡男として遇されていたともいわれています。

文龜3（1503）年、敦賀郡司であつた朝倉景豊が謀反を計画。縁者にあたる宗滴は景豊から勧誘を受けますが、たとえ多くの怨念があつても、当主を裏切るべきではないと考へ、謀反を三代当主、朝倉貞景



に通報。宗滴はその恩賞として敦賀郡司に任命され、以後、一族の重鎮として朝倉家を支える存在となつていきました。

永正3（1506）年7月、加賀・越中・能登の一揆勢が越前に侵入。30万の軍勢に対し、宗滴が総大将となり、わずか1万騎ほどの軍で応戦しました。九頭竜川を挟んで対峙した後、宗滴は、敵の大軍に味方の小勢、待つよりも打つて出るべしと、8月5日の夜、自ら約3千の兵とともに川を渡り、奇襲を仕掛けました。不意をつかれた一揆勢はたちまち総崩れとなり、退却。総大将自ら危険を顧みず大軍に乗り込むという、宗滴の勇猛果敢さが、朝倉の武威を国

外に示す事になりました。

宗滴は、他国へも出陣。若狭・丹後・近江・美濃・京都など数か国に及びました。これらは、幕府の要請によるものも多く、朝倉家の家格上昇につながつたといえます。大永5（1525）年、京極氏・六角氏と近江で対立していた浅井亮政（浅井長政の祖父）から救援の要請を受けた際には、宗滴は小谷城へ出陣。戦いの勝敗は決せず、最後は、宗滴が両者の仲介役を果たします。この仲介が、朝倉・浅井両家の絆をつくり、後に姉川の戦いをもたらす浅井長政による織田信長裏切りの伏線となつたといわれています。

天文24（1555）年、宗滴は、総大将として加賀一向一揆との戦いに出陣。その最中、病に倒れ79歳の



朝倉氏の拠点、一乗谷
（画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）

生涯を閉じます。まさに人生の幕引きの時まで、朝倉を支え続けたのです。

宗滴の言葉を記した『朝倉宗滴話記』には、「天下を取り、御屋形様（朝倉義景）を上京させるための謀略をさまざまに思案する間に夜を明かした」という言葉が残っています。宗滴には、義景を奉じて天下に君臨しようという野望があつたのです。宗滴のその思いが、100年に及ぶ朝倉の隆盛を支えたといえるのではないのでしょうか。

関連史料・ゆかりの地

西山光照寺跡



（画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）

一乗谷で最大規模を誇った寺院、西山光照寺。この付近には朝倉宗滴の屋敷があつたと伝わっています。宗滴は、屋敷の庭で鷹を卵から育てる人工繁殖を行っていたことで知られています。

【住所】福井市安波賀町（JR一乗谷駅より徒歩5分）

参考資料等

松原信之『朝倉氏と戦国村一乗谷』吉川弘文館、松原信之『越前朝倉一族』新人物往来社
宮島敬一『浅井氏三代』吉川弘文館